気むずかしさのすすめ

安田武

気むずかしさのすすめ

安田 武

新潮社版

© Takeshi Yasuda, 1978 Printed in Japan

気むずかしさのすすめ

昭和五十三年十月　十　日発行
昭和五十四年四月二十五日四刷

著　者　安田武
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
162 東京都新宿区矢来町七一
電話・業務部(03)二六六一五二一一
・編集部(03)二六六一五四一一
振替　東京四—八〇八
印刷所　株式会社金羊社
製本所　神田加藤製本
定　価　一二〇〇円

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目

次

序説・生活と文化 7
◇
気むずかしさの含蓄 29
けじめとしつけ 34
人間の学の喪失 38
「らしさ」の美学 46
「をんな」の復権 53
◇
昭和五十年・夏 63
紺 79
蚕の人工飼料 97
新橋・まり千代――芸の空間―― 101
織 128
型紙 146
楮の運命 161
路地の細道 167

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

◇
国立がんセンター 185
消えない戦争体験 189
ある町大工 193
精進なきを憂うる 197
連呼の時代 201
気質と堅気 205
NHKにモノ申す 209
家業ということ 213
ありがとう存じます 217
時間講師 221
目には青葉 225
時代遅れ——千秋楽—— 229
◇
あとがき 234
初出一覧 238

気むずかしさのすすめ

序説・生活と文化

一

四月はじめ、三日の旅程で東京を発った。

目的地は京都。「花見」の旅であったが、まず鈴鹿市白子町に立ち寄り、「伊勢型紙」の「縞彫」で、無形文化財保持者の児玉博に逢う。そして夜おそく、京都へ着いた。

翌日は生憎の雨であった。やむなく花見の予定を変更して、偶々、国立博物館に催されているという「京の染織美」展を参観することにした。夕方からは「都をどり」の見物に出かける。

三日目、初夏のような暖かさに、空は晴れ渡った。前日の雨に、いっせいに開花した桜で、街街は、見渡すかぎり花の霞につつまれていた。「友禅」の森口華弘を、中京の小川通へ訪ねる途

途の車窓から、そのあでやかな景観に、思わず幾たびか感歎の声をあげたものである。

嵯峨野へのとば口、山越中町にある佐野藤右衛門邸の枝垂桜も、みごとな満開であった。いつの年も、私は、円山公園の枝垂桜を、昼なかの賑わいのなかで眺め、ここへは夜桜見物にくるのをならわしとしていたから、紺碧の空に映えて、爛漫と咲きほこる佐野邸の枝垂の艶麗な姿を見るのは、これがはじめてのことなのだった。

寒い間とかく病いがちの私は、春のおとずれを心待ちに、じっと冬をやりすごし、京の桜と「都をどり」見物に、ようやく蘇生の想いがあるのだったが、この年の春、いってみれば、咲き乱れる桜花を背景に見立て、「都をどり」をいわば「かげ囃子」として、「伊勢型紙」、「京友禅」、さらに「染織美」展とつぎつぎに舞台が変わる、わけても豪奢な「春の饗宴」に出会うことができた、というべきだろう。

かつて九鬼周造は、さまざまの角度から『「いき」の構造』（岩波書店）を分析、考察したが、そのなかで、模様としての「いき」を、「縦縞」といっている。歌舞伎衣裳でいえば、たとえば、「大口寮」の三千歳、「源氏店」のお富、「お祭佐七」の小糸――確かに九鬼のいうとおり縞小紋こそ江戸文化の象徴といっていい。

その縞小紋の伝統を、いまに守る人が児玉博なのであった。かねがねこの名人職人から「引彫」の技法について、話を聞く機会をえたいものと思っていた、その機会に、やっとめぐり会えたわけである。縞柄には、普通「きまり筋」、「変り筋」、「養老」、「立涌（たてわく）」の四種があり、その「きまり筋」では、一寸幅に十本ないし十一本の縞（筋）を引く「大名筋」から、おなじ幅に二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

十四本以上という「極二ッ割」までの常法が定められてある。それを、児玉は、昭和四十四年、亡くなった母親はまの「糸入れ」で、三十一本を彫ったという。

話を聞いていて、しかし、私がつよく心うたれたのは、児玉博という職人の技自体に関してはいうまでもないが、それ以上に、生漉和紙の原料たる楮や、その和紙に塗られる柿渋や、また「糸入れ」に用いられる春繭などがもつ不思議というしかない自然の性質、特性にあった。いや、そうではない。そうした特性と抜き差しがたく密着した技法を発見し、定着させてきた人びとの智恵にこそ、心うたれたというべきであろう。言葉の正しい意味で、ここに「伝統」というものがあった。児玉は、その伝統に支えられる「技法」に習熟し、これを忠実に継承する職人として、「人間国宝」なのであった。

ところで、もう一人の人間国宝・森口華弘とも、私は初対面だった。京友禅の製作工程について、くわしく話をうかがい、工房における仕事の現場も、つぶさに見せていただいた。雨に降りこめられ、思いがけず「染織美」展を観たばかりの私に、森口とのこの日の会見もまた、願ってない好機といわねばならぬ。大胆な流水文様に、この人独得の蒔糊技法で地染めした友禅のあでやかな美しさに、前の日、博物館で見た「流水に萩文様小袖」を思いうかべたりしたものだ。

いうならば、昨日、江戸小紋の伝統にうたれ、今日は京友禅の美を語る、とでもいおうか。しかも、その「背景」に桜花の爛漫があり、「都をどり」が「かげ囃子」だった、とはじめに書いた。思えば、円山公園に、人びとが、いまその豊麗な開花を楽しんでいる「祇園枝垂桜」にしたって、初代桜樹の枯死に先立つ昭和二年、佐野藤右衛門が、その実五リットルをとって播種し、

爾来、今年でちょうど五十年、心をこめてきた丹精の結実としてあるのであった。いや、京の街街、日本全国をおおう桜花のすべては、自生のヤマザクラなどを除けば、みな数百年の昔から、桜樹の育生に精魂を傾けた無名の植木職たちの手にならなかったものはない。

明治五年、三世井上八千代（春子）の手ではじめられた「都をどり」は、この年、百三回目の公演を迎えた。「都をどりは……」という地方（じかた）の掛け声に、「よおいやさあ」と甲高くこたえ、柳桜の枝団扇をかざした踊り子の列が、両花道をくり出してくる序幕の置歌（おきうた）も、そして最後の切りの「ちらし」も、三世八千代の振付で最初の型が定められてから、すでに百余年の歳月を閲してきた。もし初世八千代（サト）が一流を開いたという寛政の末ごろから数えれば、井上流京舞の伝統は、四世八千代（愛子）の現在を経て、やがて二百年に及ぼうとしているのである。

春のおとずれは、そのうららかな陽光だけが、「饗宴」であったのではない。万朶の桜を含めて、それは数百年、あるいは数千年にわたる人間の「営み」が、その長い長い営みを通じ、丹精と智恵と経験をつみ重ねて準備してきたものだったのだ。やや逆説的ないい方をすれば、日常普段の生活のなかで、人びとが慈しみ育ててきたもののうちに、春という「自然」の季節があった、とさえいうことができる。そしておそらく、これが「文化」と呼ばれるものであろう、と私は思う。

二

キケロにとって、「ヒューマニティとは教養の乏しさを認めたローマ人がギリシア人のうちに見出した教養ある人間性の総体のことであつた」と、三木清が書いている。「それは何よりもギリシアの生活文化のうちにその源泉を有してゐる」という。だから、「雄弁を濫用することは非人間的である、とキケロは云ふ。また宴会で物を考へることは公の場所で唄を歌ふのと同様ヒューマニティに反することである、と彼は云つてゐる。一言でいへば、ヒューマニティとは、礼儀作法から初めて、敵の間でも守られねばならぬ正義の規則に至るまで、動物的本能を文化的慣習に変ずる一切のものを意味してゐる」というのだ。

三木清は、この文章を、昭和十三年、当時、河出書房が刊行した「廿世紀思想」叢書第七巻「人間主義」篇の「総論」として書いたのだった。だが、私は、三木がここで「人間主義」として捉え論じたもののうちに、「文化」に関する、ほとんど過不足ない定義を見出す思いがする。

「文化」という言葉ほど、この国の日常用語のなかで、普段に不幸な運命を担わされている言葉はあるまい。それは、その意味が曖昧多義であるだけではなく、何か勿体らしく荘重に見えながら、まるで無味乾燥でなければ、やや軽率な滑稽感をともなう。ある者は、「文化」という言葉に、たとえば「重文」と銘うたれた古臭い仏像や建造物など、重要文化財や「国宝」を思いうかべるかも知れぬし、まったく反対に、ある者は、文化ナベ、文化コンロ、文化タワシといった、

手軽で安直な生活用具を連想するかも知れないのだ。

文化勲章とか文化功労者といえば、すでに現役を去った老人の姿が思いうかび、逆に進歩的文化人ということになれば、政治・市民運動に東奔西走し、口角泡をとばして論争に熱中する「先生」がたの姿がうかんでくるという始末である。

戦争に敗れた日本が、過去の超国家主義・軍国主義を清算して、平和国家・文化国家としての再生を誓ったときから、皮肉なことに、「文化」の観念は、一層、みじめでひどい有様になったのだった。政治指導層からジャーナリズムまで、口を開けば「文化国家日本」を叫ぶ当時の世相を、ある漫画家は「ブンカブンカ　ドンドン」といって、その軽薄な風潮を諷していた。自国の過去は、すべて「封建的」という一言によってしりぞけられた。甚だしい比喩を借りれば、米のめしや味噌汁は「封建的」だが、パンと牛乳は「文化的」といわぬばかりであった。実際、厚生省は、わが国民一人当りの牛乳摂取量が、「欧米先進国に比較して、まだまだ低い」という統計を、何度くりかえし発表したことだろうか。

近代日本が、自国の過去をいっさい否定して、ただひたすらに欧米「先進国」の例を範とし、これにおのれを擬そうと腐心した歴史は、しかしながら、敗戦後がはじめてのことではなかった。明治九年、わが国に西洋近代医学を移植すべく招かれたドイツ人医師ベルツは、その日記にこう誌していた。

ところが――何と不思議なことには――現代の日本人は自分自身の過去については、もう何も知りたくはないのです。それどころか、教養ある人たちはそれを恥じてさえいます。「いや、

何もかもすっかり野蛮なものでした〔言葉そのまま！〕」とわたしに言明したものがあるかと思うと、またあるものは、わたしが日本の歴史について質問したとき、きっぱりと「われわれには歴史はありません、われわれの歴史は今からやっと始まるのです」と断言しました。（トク・ベルツ編『ベルツの日記』菅沼竜太郎訳、岩波文庫。傍点原文）

だが、私の真意はいま、日本の近代を宿命的に支配した欧化主義思想の軽薄さを指摘して、却って国粋主義的な発想を鼓吹することにあるのではない。私たちの「近代」にとって、真実の不幸は、こうして「文化」が、学問・思想の領域であれ、あるいは電気器具やナベ釜といった類であれ、常にそれは「よそ」からやってくるものという観念が、知識人・一般庶民層を問わず、いつか暗々裡に、人びとの間で固定してしまった、ということにあるはずである。

文化（カルチュア）という言葉が、カルティベイト（耕す）という語源に発する本来の語感は、かくてこの国の「文化」観念に、まったく無縁のものとなってしまった。「文化」は、農民がその土地をよく耕すことによって、よき収穫を得るように、私たちが日常の生活それ自体、その周辺を丹念に「耕す」ことによってしか、ありえないはずのものなのだ。それが、あのキケロのいう、あるいは三木清が指摘した「教養ある人間性の総体」ということであり、「礼儀作法から初めて、敵の間でも守られねばならぬ正義の規則」ということであり、総じて「動物的本能を文化的慣習に変ずる」ことであった。つまり、それは抑々、「生活文化」としてのみありえたのだ。私自身の言葉で、おなじことを定義すれば、文化とは、私たちの日々の暮らしが、長い歴史の経験のなかに蓄積し、継承してきた「生活の智恵」以外の何ものでもない、ということになる。

だから、ベルツは、一方で、日本人の軽薄な欧米模倣をあざ嗤いながら、他方では、祝日の街頭を埋めた若い娘たちの姿に、「東京で今日ほど、たくさん美しい娘を見たことがない。このみずみずしさ、このすこやかさ、このあでやかな着物、この優しい、しとやかな物腰」と讃歎し、また、「全く、日本のよい家庭の一挙一動くらい、見て感じのよいものはない」とたたえた。自邸の庭を手入れした職人の技を激賞して、「日本人は、平凡な庶民階級にいたるまで、何とまあ趣味を解することだろう！　わが家の庭師は、もちろん名のある男だが、庭園に小さい丘をこしらえ、岩石と植物の群で実に好みよく飾ってくれたので、いつも見るたびに楽しんでいる」と日記に誌した。明らかに、ベルツは、そこに日本の「文化」を見ていたのだった。

三

京都の博物館で「京の染織美」展を観た、と前に書いた。その時、オヤと思ったことがある。オヤと思い、つぎの瞬間、なるほどな、と私は自らうなずき、納得した。

というのは、一昨年の秋、東京上野の国立博物館で「日本の染織」展が催された時と、会場の雰囲気が、まるでちがうのである。会場の規模は、むろん東京の場合がやや大きく、展示品も、東京では飛鳥・奈良の上代裂にまで溯っていたとはいえ、江戸期に入れば、おなじ衣裳が幾つか両会場でダブっていた。これは当然のことだ。にもかかわらず、まるでちがうと私が感じたのは、会場に来ている参観者たちの「反応」がちがうのであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com